

3 方向からの研究—原作、翻訳、映画、それぞれを味わう

山 森 章 市

大学2年の後期に、翌年のゼミ履習選択があった。中でも私が1番興味を持ったのは、英米文学の中でも日本語に翻訳され且つ映画化された作品を、原文、翻訳、映画の3方向から分析するという中村ゼミであった。

ゼミの形式は1人の学生が指定された部分の原文を読み、翻訳や映画と比較して疑問点などを出す。その疑問点についてゼミの学生で話し合うものであった。1人の学生が作ったパターンを後の学生が踏襲するという型が出来上がってしまったために、もう1つ活発な論議ができなかったのは多少残念である。

専門ゼミナールⅠでは、Truman Capote (1924-84) の小説*Breakfast at Tiffany's* (1958) を取り上げ、前期、後期を通じて研究した。原文、翻訳、映画の3方向から分析すると同時に、慣用表現の学習、映画の場面を使っのヒヤリング練習も行なった。

専門ゼミナールⅡではDaniel Keyes (1927-) の中編小説“Flowers for Algernon” (1960) を研究対象に取り上げた。中編ということ、またゼミに慣れたためハイペースにしたということもあって半年という短い期間ではあったが無事に終了することができた。ただ、教育実習などで欠席したために流れに乗れなかったのが少し残念である。

3年のレポートは*Breakfast at Tiffany's*のHollyが抱え込んでいた「いやな赤」の持つ意味について研究した。Hollyが持つ「いやな赤」とは主人公が推測した憂鬱症とかただ悲しいことという意味を持つものではなく、自分の生活に、何が起ころか分からない漠然とした不安のことを指すと推測した。そして「いやな赤」が形成された背景を分析した。

4年のレポートは精神薄弱者が主人公の作品について研究した。“Flowers for Algernon”に登場するcharlieはIQ68の精神薄弱者である。彼は実験の手術を受けIQが3倍になる。だがそれは一時的なものであった。charlieの葛藤の様子とAlgernonというねずみとのかかわりを描いた中編小説である。精神薄弱者に対する偏見などのことがレポートの中心になった。

1年半の間、専門ゼミナールを履習したが、小説も原文から日本文への翻訳の仕方を持ち味がかなり変わらと思った。そして原文に忠実に、しかも持ち味を壊す事なく自分で翻訳することは英語の勉強にかなり役立つだろう。小説に限ったことではないだろうが、1つのキーワードにこだわって作品を読むと前とは違った深い読みができるであろう。原作と映画の脚本とを比べて、自分だったらこういうふう

(指導教員 中村 敦志)